大栗裕と仏教合唱 – 《歎異抄》と《「御文章」より》を中心に

白石知雄

大栗裕（1918-1982）と仏教

（1950 年頃　清水脩《礼讃「無量寿」》）

1958 年　花柳有洸のために創作日本舞踊《円》の音楽を作曲　（←　黛敏郎《涅槃交響曲》？）

1959 年　12 月 5 日、合唱曲《火宅》を龍谷混声合唱団が初演

1961 年　11 月 27 日、交響管弦楽のための組曲《雲水讃》を毎日放送が放送初演

1964 年　4 月、京都女子大学文学部教授に就任（教育学科音楽教育専攻）

1965 年　12 月 12 日、合唱曲《歎異抄》を龍谷混声合唱団が初演

1971 年　12 月 9 日、合唱曲《「御文章」より》を龍谷混声合唱団が初演

1973 年　7 月 7 日、合唱曲《悲歎述懐》を龍谷大学男声合唱団が初演

1975 年　12 月 14 日、合唱曲《大無量寿経讃》を龍谷混声合唱団が初演

大栗裕「自作について」、大阪フィルハーモニー交響楽団第 15 回定期演奏会、1962 年 1 月 12 日

私は小さい時分「大きくなったら禅宗の坊さんか、山奥にある小学校の先生にでもなろう」と大真面目に考えていた。今の私を知っている人がこんなことをきけばふき出してしまうであろうが、その頃に本当の夢であった。恐らくこのような宗教的な雰囲気に憧憬に似た気持を持つに至ったのは、小学校の頃高野山に夏季休暇を利用した林間学舎に行って、子供心に―当時の高野山は今とちがってはるかに静寂であった。―こんなところに一生住んでみたいと思ったからにちがいない。私は人が思う程あつかましくもなければ気も強くない。さびしがりやで小心寞々とした弱い男だと今でも思っている。その様な性格が現世をイントンする逃避的な考え方に自ら同調していったのであろう。それにもう一つ、私の父は非常な美声である。これは私自身も認めるのだが、やはり子供の頃、有馬へ病後の休養に出かけて、父と一緒に妙見山に登った時、摂津の空に訝するように音吐朗々と御詠歌を唱えたのを記憶している。この声は私の耳に未だ昨日の事のように鮮かに残っている。それやこれやが、現世甚だ生ぐささ極まる人生を生きている私にこの「雲水讃」を作ろうとする考えを抱かせたはるかな原因であったろう。

[……中略……]

幸い今度大阪フィルの定期演奏会で朝比奈先生がこの曲をとり上げていただくことになり引き続いてローマ、ライプチヒ、ドレスデン、ハンブルグ等で演奏して下さる事に成ったので構成上の改訂を加えたプログラムにベートーベン、チャイコフスキーと一緒に並ぶ光栄さに喜ぶよりも、私の曲の拙さに私自身世をはかなんで現世を逃避するようなことにならなければ良いがと考えている。

大栗裕(1918-1982)の仏教洋楽作品

ジャンル	作品名	作詩・台本	初演
舞台作品	創作日本舞踊「円」	白隠慧鶴	1958年(花柳有洸委嘱作品、詳細不詳)
	オペレッタ狂言「悪太郎」	茂山千之丞	1962年7月14日、京都女子大学女声合唱団演奏会、岡山県津山市立第一小学校講堂
放送音楽	玉虫厨子幻想	山崎正和	1964年5月17日、現代の日本音楽、NHKラジオ第2放送
	仏像によせて	--	1964年11月8日、現代の日本音楽、NHKラジオ第2放送
管弦楽・室内楽	交響管弦楽のための組曲「雲水讃」	--	1961年11月27日、芸術祭参加作品、毎日放送
	打楽器とピアノのためのソナタ「無」	--	1962年(詳細不詳)
	管楽器と打楽器ための ディヴェルティメント第2番「三つの像」	--	1963年10月31日、大阪フィルのメンバーによる室内楽の夕、毎日国際サロン
	管弦楽のための音楽「呪」	--	1968年9月7日、大阪フィルハーモニー交響楽団第70回定期演奏会、大阪厚生年金会館大ホール
	管弦楽のための前奏曲「飛翔」	--	1973年6月26日、民主音楽協会例会、京都会館第1ホール
交声曲	太子讃 聖徳太子千三百五十年御恩讃仰曲	大西利夫	1971年4月27日、聖徳太子千三百五十年御忌記念新作をささげる演奏会、渋谷公会堂
合唱曲	火宅	藪田義雄	1959年12月5日、龍谷混声合唱団第14回定期演奏会、弥栄会館
	雀に	貫休 原田憲雄	1965年6月12日、京都学生仏教音楽研究会第12回定期発表会、大谷ホール
	歎異抄	唯円	1965年12月12日、龍谷混声合唱団第20回定期演奏会、京都会館第2ホール
	「御文章」より	蓮如	1971年12月9日、龍谷混声合唱団第26回定期演奏会、京都会館第1ホール
	悲歎述懐	親鸞	1973年7月7日、龍谷大学男声合唱団第7回定期演奏会、京都会館第2ホール
	大無量寿経讃	宮地廓慧	1975年12月14日、龍谷混声合唱団第30回定期演奏会、京都会館第2ホール
	鑑真和上円寂千二百年に当り詠める長歌並びに短歌一首	亀井勝一郎	1976年(コール・ルンビニー創立20周年記念作品、詳細不詳)
	京都の詩 京都のみ仏に捧げる抒情詩	山崎澍朗	1977年7月2日、京都女子大学女声合唱団第15回記念定期演奏会、大谷ホール
仏教讃歌	きよきひかり　坊守式のうた	大谷嬉子	1965年?(詳細不詳)
	私の中に	山崎澍朗	1969年12月4日、龍谷混声合唱団第24回定期演奏会、京都会館第1ホール
	いのちはほろびない	D.Hunt(作) 宅地廓慧(訳)	1969年12月4日、龍谷混声合唱団第24回定期演奏会、京都会館第1ホール
	みほとけのほほえみに	山崎澍朗	1969年12月4日、龍谷混声合唱団第24回定期演奏会、京都会館第1ホール
	新春讃頌	藤範あきら	1969年(詳細不詳)
	みんなのつどい	?	1972年(詳細不詳)
	さよなら又あおう	山崎澍朗	1972年(詳細不詳)
	心のひと	九条武子	1977年(詳細不詳)
	私とともに	山崎澍朗	1979年12月5日、龍谷混声合唱団第34回定期演奏会、大谷ホール
	み手にゆだねて	山崎澍朗	1979年7月11日、京都女子大学女声合唱団第17回定期演奏会、京都会館第2ホール
	よろこびのたねまく日は	浅原才一	?
	ふんわり雲さん	?	?

清水脩作曲　礼讃「無量寿」

歌詞：正信念仏偈（親鸞『教行信証』行巻末尾）冒頭（帰命無量寿如来 南無不可思議光）

作曲：1950 年頃　出版：浄土真宗大谷派教學局『仏教讃歌』、1956 年

演奏：木村四郎（指揮）、龍谷大学男声合唱団（『仏教讃歌集　響流』、1979 年より）

大栗裕作曲　歎異抄

（前奏曲／三礼文／第１章「弥陀の本願」／第２章「親鸞におきては唯念仏して」／第３章「善人なおもって往生をとぐ」／第４章「弥陀の五劫思惟の願を」／念仏／和讃）

歌詞：唯円「歎異抄」第 1、2、3、17 章

作曲：1965 年　出版：龍谷混声合唱団『合唱曲集　響流　混声編』、1972 年

演奏：林達次（指揮）、伊吹元子（ピアノ）、村田真規（エレクトーン）、東保（バリトン）、龍谷混声合唱団（龍谷混声合唱団第 28 回定期演奏会、1973 年 12 月 8 日）

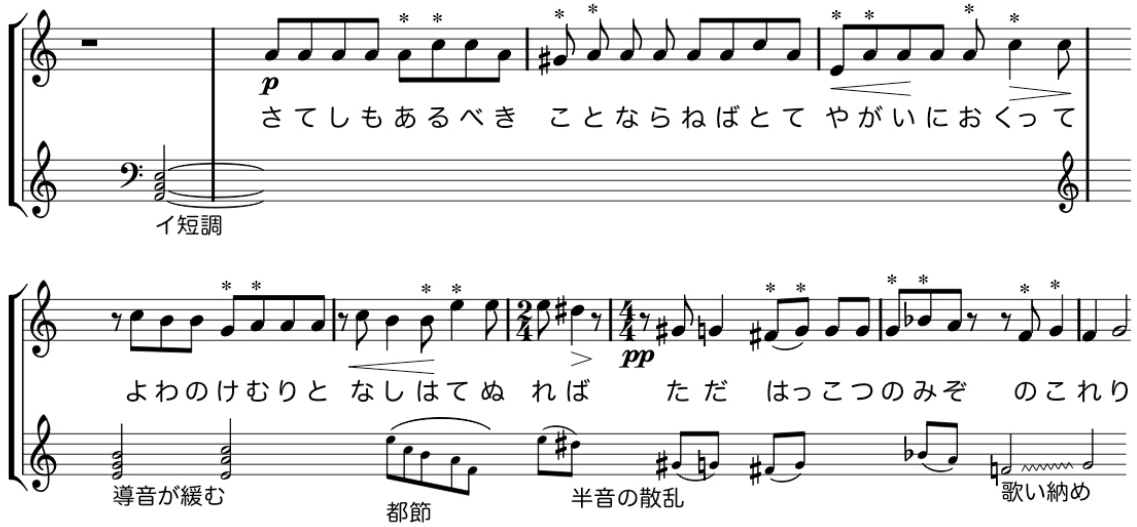
大栗裕作曲　「御文章」より

歌詞：蓮如「御文章」四帖第四通（三首詠歌章）、四帖第十六通（白骨章）

作曲：1971 年　未出版

演奏：大栗裕所蔵オープンリールテープより（龍谷混声合唱団第 26 回定期演奏会、1971 年 12 月 9 日のためのリハーサルか？）

譜例：大栗裕《「御文章」より》第２曲



大栗裕「音楽と学生と私」、『厚生指導』97、1974 年、43-44 頁

技術顧問という仕事は、普通の顧問とは問題にならない程多忙である。春夏の合宿、演奏会、演奏旅行などと数え上げると、これらの行事に総て参加したのではこちらがたまらない。といって学生から依頼されれば何とか日程をやりくりして、ついつい彼等と行を共にしてしまうというのは、やっぱり私自身も楽しいからなのだ。

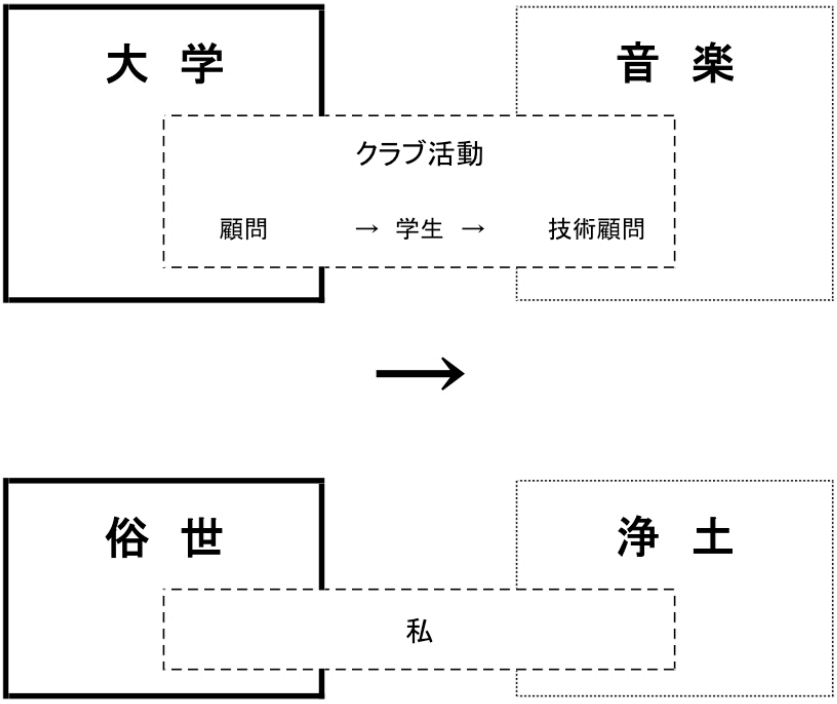
音楽関係の課外活動は、その取扱う演奏形態が種々あろうと本質的には変らないと私は思っている。わかりきった話で恐縮ではあるが、すべて音を出すことにつきるからである。ところがこの音というものは人間に絶えざる克己心と綿密な注意力の集中を要求する。

[…中略…]要するに音楽演奏は作曲家の意図を再現するために、豊かな音楽性にもとづく美的感覚の訓練ばかりでなく、更に技術的な作業を必要とする。それは、完全無欠なものでなければならない。世に巨匠と呼ばれる人たちだけが、それをやってのけることができるのである。

学生の課外活動であるから、そこまでは要求しないというのならば、私はそうした人達は音楽をする資格はないと考える。学生だから、アマチュアだから拙いのはしかたがないというのは弁解にすぎない。良い音楽を創造するための苦しい努力の結果が、完全無欠たり得ないのは天才でない人達の宿命であるにしても、彼等の目的はそこになければならない。[…中略…]私は課外活動をただ単なる娯楽やレクリエーションとして考えることには賛成できない。たとえ、それがスポーツであろうと、音楽であろうとすべての課外活動は、若い学生達の肉体と精神を、教室とはちがった場で鍛練することが目的であると思う。

[…中略…]

音楽だけに限らないが、自分が苦しみ努力しなければ、我々の先輩が遺してくれた文化的遺産はその門戸を堅く閉ざして開いては見せてくれないのである。その努力を惜しみ、あまつさえその努力を徒労とするならば、もう何をか云わんやということになる。

[…中略…]

そして、この課外活動の間に自然にはぐくまれる友情、それはある共通の目的を伴った友情であるが、私の見る限りでは同じクラスの友人よりは深くそして永続性のあるものになっている。彼等は卒業してもたがいに自分の消息を交換し合い、仕事の余暇を見つけては集り友情を温めあっている。[……中略……]卒業して十年もたった OB や OG が、細君や子供同伴で、学生時代の話に哄笑、爆笑している様は私にとって顧問生活のやり甲斐をしみじみと感じさせるのである。